学生相談所と学生自主活動ルーム連携による
学生サポート体制の強化の実践

阿　濱　志　保　里
吉　村　誠
今　井　佳　子

要旨

本報告では，山口大学における学生支援機関である学生相談所と学生自主活動ルームのそれぞれの役割を確認する。また，それぞれの専門的な知識を生かし，相互に情報の共有関係を持つことで,学生に対してより効果的な学生支援機関として機能を充実させるための平成 22 年度における学生のサポートの試みの報告と今後の課題について述べる。

キーワード

学生，学生支援，学生相談，学生相談所，学生自主活動ルーム

1 はじめに

大学教育において，学生たちの抱える諸問題の相談件数は年々増加傾向にあり，相談内容に関しても多様化が見られる。相談方法についても面接相談だけでなく，電話やメールでの相談件数が増えている。（今井，2009）そのため,学生の状況を的確に把握･理解し，学生の支援活動を行うことが求められている。さらに，学生の学習活動の支援だけでなく，生活や精神面など，学生の生活全般において状況を把握し，より効果的な方法で学生支援活動の体制をより強化する方法の検討が必要である。

2 学生相談所の活動

山口大学では，学生相談所は 2003 年度より大学教育機構の学生支援センター所属の相談機関となり，臨床心理士の資格を持つ専門家がカウンセラーとして学生や教職員の相談に月曜日から金曜日まで当たっている。(名島，2006）業務内容は，学生の相談を柱とし,「つないで支える役割：連携」と「心の準備をする役割：心理的教育」があげられる。学生たちの悩みに対応するだけでなく，他の部署や部門，教職員と協力し，学生の支援を行うために，つないで支える役割がある。また，心理的教育として，各学部において年度初めに行われるオリエンテーションでの広報活動が挙げられる。学生たちが大学生としてよりよい大学生活を送るために，心との付き合い方の方法を学ぶ場の提供を行っている。（恒吉，2009）

3 学生自主活動ルームの活動

山口大学内における学生の自主的な活動の支援を目的とした学生自主活動ルームが 2000 年に設置された。学生自主活動ルームは

『自主活動とは，その活動を通して学生の自主性や創造性を培われるような，無報酬の課外活動全般を意味する。自主活動とは，自身の新たな側面を発見し，より見つめ，自身の個性として定着されていくことが可能な活動であると同時に，その活動の改善案などの新たな方策を自らも模索し，実行できる場でなければならない。』と定義付けている。

通常業務は，おもしろプロジェクトの受付・相談業務や，学生の自主的な行動を支援し，専門家や外部機関との橋渡しを行うコーディネートなどの業務も行っている。さらには，学外からのボランティア情報を取り扱い，学生への掲示・説明を行っている。平成 22 年度の学生自主活動ルームの相談件数は増加傾向にあると同時に，相談内容も学生の自主的な活動ばかりではく，個別相談，生活面での相談，学生生活での困りごとが挙げられる。学生の諸問題への解決が困難になってきたため，より専門的なサポート体制の構築を試みた。

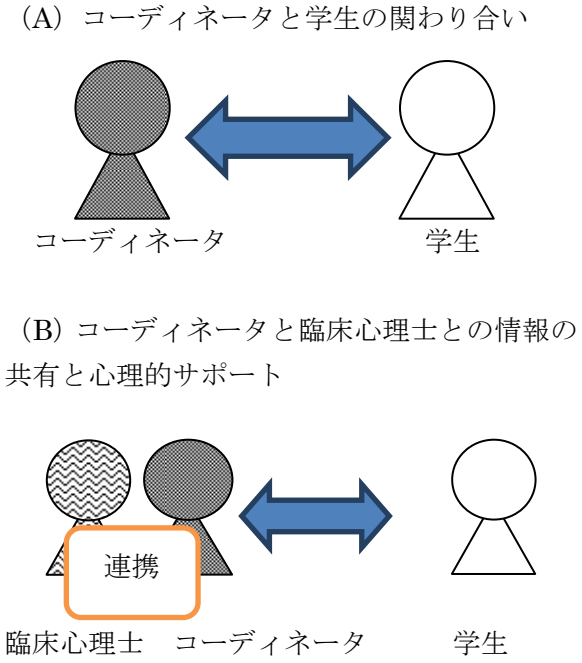


図 1 学生相談所と自主活動ルームの連携体制

4 連携体制の検討

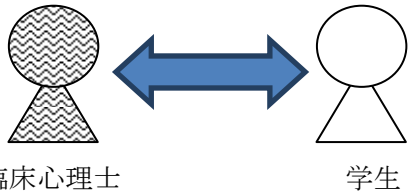
平成 22 年度に学生自主活動ルームにおいて，ハラスメント等の相談等，学生自主活動ルームでの判断を超えるものや，より専門的な知識を必要とする事案が見られるようになった。学生のより安心のできる大学生活のためには，専門的な意見やアドバイスが必要だと判断された。それに伴い，学生相談所の臨床心理士との情報交換の機会を持ち，専門的なアプローチでの解決を試みた。学生相談所の臨床心理士と学生自主活動ルームのコーディネータとの連携体制の流れを図 1 に示す。

学生相談所と学生自主活動ルームの連携体制の中で，学生自主活動ルームのコーディネータと学生の関わり合い（A）として，ボランティア活動など自主活動ルームの主たる目的の相談業務の中で，グループ内の人間関係などに起因する問題についての相談，キャリア形成に関わる活動の中での進路に関する相談などが挙げられる。

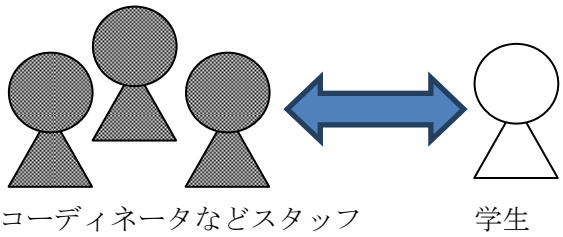
その中で，人間関係のトラブルに発展するような深刻な事案や学業不振につながる事案はコーディネータと臨床心理士との情報の共有と心理的サポート（B）を連携して行った。

また，効果的な学生支援をおこなうために，学生自主活動ルームを相談の窓口だけでなく，学生自主活動ルームの環境を生かし，学内における「大学生活の活動の場」を目的として利用することはできないかと考えた。学生自主活動ルームでは，ボランティア活動や支援活動を通じ，他の学生と関わり，大学生活を構築するきっかけ作りなどができる。その利点を生かし，学生生活での支援活動としての役割の体制の構築を行った。流れを図 2 に示す。

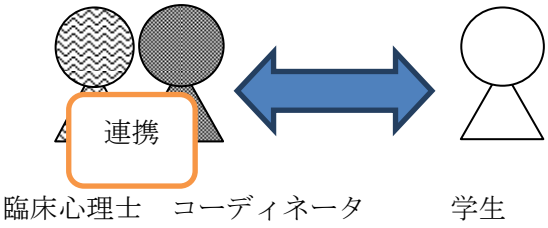
（C）スタッフと学生の関わり合い
（学生相談所）



（D）複数のスタッフと学生の関わり合い
（自主活動ルーム）



（E）スタッフ・学生と学生の関わり合い
（自主活動ルーム）



（F）複数の学生と学生の関わり合い
（自主活動ルーム）

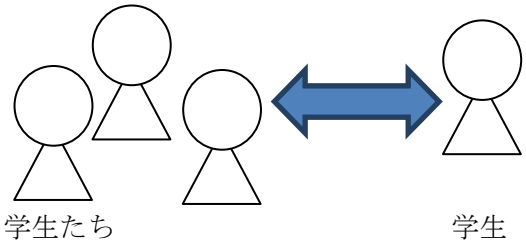


図 2 自主活動ルームにおける学生との関わり

学生相談所における臨床心理士と学生の関わり合い（C）の１つとして，大学生活において人とうまくコミュニケーションが取れないなどの人間関係などに起因する問題についての相談などが挙げられる。

臨床心理士とコーディネータの十分な情報共有と理解のもと，対象の学生には学生自主活動ルームに定期的に来室を促し，学生自主活動ルームのスタッフと活動（D）を通じてスタッフとの関わり合いを持たせる。その結果，学生の自己の肯定力を高め，社会における自己の存在を認識する機会の場の提供を行う。

活動を通じて学生自主活動ルームのスタッフだけでなく，学生と学生の関わり合いを行い，その状況を臨床心理士と密に連絡を取り（E），考慮しなければいけないことなど学生の状況から最も適した関わり合いを十分に検討することが望まれる。

さらに活動を通じ，学生自主活動ルームのスタッフだけでなく，来室する他の学生と活動を通じての関わり合い（F）を持つことで，大学におけるコミュニケーション能力などの人と関わりあうための能力を育成し，社会適用の確立を行っている。

この連携体制の試みを行う際，対象の学生の状況を臨床心理士と学生自主活動ルームのスタッフが常に共通理解し，対応に当たることが望ましい。また，定期的に学生の面談を行い，感じていることや思っていることなど心的状況を理解しておくことが重要になると考える。学生自主活動ルームが学生の自主的な活動の支援を行うだけでなく，学生の抱える諸問題に対応できる窓口の１つとしての役割が望まれる。

5　実践から得られた成果と課題

5.1 成果

本報告に関わる成果として，学生からの相

談内容で専門的な知識を要する諸問題に関しては，迅速かつ，的確な対応ができ，学生の負担やストレスを最小限に抑えられたと思われる。解決後，学生の元気な表情が見られるようになった。

また，学生自主活動ルームを学生の活動の場としての環境の提供に関しては，一定の成果が見られた。学生が学生自主活動ルームに定期的に来室し活動に関わることで，自己肯定感が向上し，受身だった活動が主体的な活動へと変化が見られた。さらに，学生自主活動ルームを活用している他の学生と場の共有をすることで，所属意識の向上や他の学生たちの活動を知ることも大きな収穫だったように思われる。それをきっかけに，自分のやってみたい活動への動機付けになったり，社会参画への意識付けになったのではないかと推察される。

学生相談所との情報の共有化に関しては，不定期かつ随時，相互の空き時間を利用しての訪問が主であった。今後は定期的な会議などを行い，情報の共有化を重視することが考えられる。方法としては，対象の学生の状況や事例報告などを記述し，ポートフォリオ化を行い，情報の整理と共有化を図りたいと考える。

5.2 課題

本連携体制の強化における課題は，効果的な情報の共有化の体制の構築とともに，学生の状況を的確に把握・理解し，さらには定期的な情報交換の場が必要であると考える。今年度は学生相談所と学生自主活動ルームにおいての連携体制の強化を行い,試みを行った。次年度以降，他の相談機関との連携が求められる。学内の各キャンパスに相談所があることや，保健管理センターにおいても相談窓口があり，今後は情報交換や対策方法などに関しての情報の共有化について相互に協力が必要であると考えられる。学生の状況を正しく理解し，より効果的な学生へのサポート体制を確立するために，専門的な研修会などを行い，学生を支援する立場で必要とされる知識や技術の向上改善なども検討が必要であると考えられる。

【参考文献】
『山口大学相談所年報』，2006
『山口大学相談所年報』，2009